

2013.11.27 (水) 社会学部チャペル

「釜ヶ崎で気づいたマスターリー・フォア・サービス」

白波瀬 達也 社会学部教務補佐

私は 1999 年に関西学院大学社会学部に入学し、卒業後は同じ大学の大学院に進学しました。大学在学中には「格差社会」が耳目を集めるようになっており、強い関心をもっていました。格差社会の実態を具体的な現場で把握したいと思うようになり、大学院に進学。釜ヶ崎の調査・研究に着手するようになりました。

大学院の修士課程の頃は、自分が行きたいときに釜ヶ崎に出向き、調査をさせてもらっていたのですが、こうしたアプローチではどうしても地域の実態を適確に描写できることができず、思い悩んでいました。その原因は、自己都合で釜ヶ崎に足を運んでいたからに他なりません。「もっと深く地域のことを知りたい」と思い、博士課程に入ってから地域福祉施設で働かせてもらう機会を得ました。その施設では主に相談援助に関わる仕事をしていました。

正直に告白すると、大学に在学している頃は社会福祉に対する関心はほとんどありませんでした。私のなかの社会福祉のイメージは「お堅い社会制度」であり、「お上」の臭いが漂うものでした。また、関西学院大学のスクール・モットーである *masterly for service*（「奉仕のための練達」と訳されます）も何だか弱々しくてパツとしないなと思っていました。そもそも私自身、「人に仕える」ということがとても苦手な人間でした。しかし、釜ヶ崎と関わるようになるなかで、本田哲郎というカトリックの司祭との出会いが私の *masterly for service* イメージを刷新してくれました。

本田神父は日曜日に釜ヶ崎にある福祉施設「ふるさとの家」でおこなわれるミサでも、自身の著書においても「社会的弱者」のことを「小さくされた者」と表現します。決して「小さい者」とは言いません。本田神父は聖書を原典から忠実に翻訳し直す作業のなかで、今日の聖書の訳が歪められていることに気付いていきます。そして次のようなことが聖書の根幹的なメッセージであると述べます。

貧しく小さくされた人たちのいつわらざる願いを真剣に受けとめ、その願いの実現に協力を惜しまないときに、人は共に救いを得、解放していただける。それが神さまの力だということです。

（本田哲郎, 2006, 『釜ヶ崎と福音』岩波書店, 35 ページ）

そして、小さくされた人々との望ましい関わり方については次のように説明しています。

小さくなる競争とか、貧しさごっこは、やはり意味がないのです。無理して、自分を小さくされている者の仲間入りをしなくてもいい。大事なのは、その人たちの思いを心から尊重し、その真の望みに耳を傾けて連帯し、その願いの実現にわたしたちがどのくらい本気で協力するかなのです。（本田哲郎, 2006, 『釜ヶ崎と福音』岩波書店, 71 ページ）

私が本田神父からこうした関わりの姿勢を学ばせてもらったときに、大学で折に触れて耳にしてきた **masterly for service** とシンクロしたのです。今まで、私が **masterly for service** を内面化できなかったのは、誰に仕えるべきなのか判然としなかったからです。しかし、本田神父との出会いを通じて、仕えるべき相手、優先順位がはっきりしてきたのです。こうした着眼を得られるようになってから、社会問題の捉え方は非常にクリアになりました。また、自分が準拠すべき「関わりの姿勢」が明確になったことで、ブレずに仕事ができるようになったとも思っています。

「小さくされた者」は「小さい者」とみなされやすく、「小さい者」は自己責任の結果として排除されがちだと私は考えています。「小さくされた者」という見方をするのは、眼前にある問題を自己責任とするのではなく、「他者の悪意」や「社会構造の歪み」として捉えることを可能にします。こうした見方は私が長年学んできた「社会学」の見方とも重なります。

大学における社会学の学びにおいては、社会問題を社会構造との関わりから捉える視座の獲得を目指しています。つまり現象を構造的に理解するという学習です。私自身、こうした視点が社会学の一番の醍醐味だと思っています。しかし、大学生たちには構造の理解だけでとどまってほしくない。構造を理解したうえで、次にどう行動に移すのか、ということが重要だと思っています。関西学院大学のスクール・モットーである **masterly for service** という観点を取り入れるのであれば、どのように行動すべきか、自ずと分かってくるのではないのでしょうか。

私はこうして大学卒業後に **masterly for service** の「出会い直し」を経験することができました。他の卒業生たちも、様々な経験のなかで出会い直しをしていることだと思います。あらゆる価値が相対化する現代社会のなかで、自身が依拠するものをもっているということは大きな強みです。在学生の皆さんもそれぞれの生活のなかで **masterly for service** との出会っていただければと思います。